

芦屋大学論叢 第74号

(令和3年3月22日)抜刷

保健体育科教員を目指す学生の
社会的スキルに関する研究

ーダンス授業の取り組みを通してー

森 田 玲 子

保健体育科教員を目指す学生の社会的スキルに関する研究

—ダンス授業の取り組みを通して—

森 田 玲 子

1. はじめに

人は、独りでは生きてはいけない。人は、他者との相互作用を通して、対人関係が形成されていく。

人の対人関係は養育者との関係から始まり、仲間との対人関係は幼児期に入り主に遊びの中で獲得していく。その後、児童期、青年期と成長するにつれて、対人関係の幅が広がり、他者とのつきあい方も複雑になっていく。

人と関わっていく際、その関係性を左右するものの1つは、社会的スキルを獲得しているかどうかである。社会的スキルとは、他者との円滑なコミュニケーションを営み、対人関係を適切に構築、維持する能力¹⁾であり、他者との関係や相互作用を巧みに行うために、練習して身につけた技能²⁾のことをいう。社会的スキルの高さは、仕事面での誠実さ・職務遂行能力・給料や、CMCでの精神的健康³⁾、学業成績⁴⁾などが、適応した結果となっている。一方、社会的スキルの不足は、経験の開示や意見表明が少ない、会話へ積極的に参加しない、相手の陳述にコメントや反応をしない⁵⁾、精神的健康の阻害⁶⁾、孤独感⁷⁾など、対人関係の形成や維持を妨げ⁸⁾、様々な不適応状態に繋がることが報告されている。

社会的スキルの獲得は、スポーツ活動や体育授業の関連性についても報告されている。例えば、西田他は組織キャンプ体験⁹⁾、中澤他はスキー実習¹⁰⁾とスポーツ演習¹¹⁾において、社会的スキルの向上を目的としたプログラムを実施し、その結果、社会的スキルにポジティブな影響を与えたと報告している。その種目の1つに、ダンスがある。

小学校、中学校、高等学校の体育授業の種目の中にダンス授業が取り入れられ、中学校第1学年及び第2学年が必修となっている。ダンス系領域は、表現遊び・表現・創作ダンスの表現系ダンス、リズム遊び・リズムダンス・現代的なリズムのダンスのリズム系ダンス、フォークダンスの運動種目ごとに指導内容が整理され、系統化されている。文部科学省は中学校・高等学校の学校体育のダンスにおいて、ダンスは、イメージを捉えた表現や踊りを通じた交流を通して仲間とのコミュニケーションを豊かにすることを重視する運動で、仲間とともに感じを込めて踊ったり、イメージを捉えて自己を表現したりすることを楽しさや喜びを味わうことのできる運動である¹²⁾と述べている。

また、ダンス授業は、先述したスポーツ活動や体育授業と同様に、社会的スキルとの関連性があると報告されている。例えば、高校生女子154名を対象に身体面・心理面・心理社会面の三側面から検討した研究¹³⁾や、レクリエーション実習を受講している学生44名を対象とした研究¹⁴⁾では、社会的スキルやライフスキルの向上と、学校生活への促進もみられたと指摘している。

スポーツの専門大学であるO大学では、社会人として教育者として行動力のある教員になるための学習を実施し、生徒と信頼を築き、スポーツを通して、高度な技量と行動力を身につけたアクティブ・ティーチャーをめざす教員を育てることを目標としている。そのためには、社会的スキルの獲得が重要になってくる。

そこで、本研究では保健体育科教員を目指す学生を対象に、ダンス授業における自己評価が、社会的スキル獲得に与える影響について検討する。

2. 方法

2-1. 調査用紙

社会的スキルは、菊池によって開発された KiSS-18 を使用した¹⁵⁾。KiSS-18 は、18 の設問からなり、5 段階で評価する社会的スキルで、1. 初歩的スキル、2. 高度なスキル、3. 感情処理のスキル、4. 攻撃に代わるスキル、5. ストレスを処理するスキル、6. 計画性のスキルと 6 つの下位尺度に分類されている。自己評価は、授業時に毎回記録しているダンスⅡ学習ノートの自己評価欄 10 項目を用いた（資料 2）。

2-2. 調査時期及び方法

調査は、O 大学の体育科教育コース 3 年次配当科目で、必修の通年科目ダンスⅡで実施した。

KiSS-18 の調査は、2019 年 4 月～2020 年 1 月に実施し、前期初め（4 月）、前期終わり（7 月）、後期初め（9 月）、後期終わり（1 月）の 4 回、授業時間内に配布・回収した。自己評価は、毎回記録するダンスⅡ学習ノートの一部で、授業時間内に記録し時間が不足した場合は課題とした。

2-3. 社会的スキルを目指した主な授業プログラム（ダンスⅡ授業内容は資料 1）

[グループでフォークダンスの模擬授業案の作成及び発表]

フォークダンスの模擬授業グループは、色んな仲間と関わりを持たせるために、男女が入ることに加え、第 7 回で発表した現代的なリズムのダンス『ワタリドリ』のグループメンバーが一緒にならないよう、8 グループに配分した。

学生達がグループ活動を始める前に、「主体的・対話的で深い学び」で行うよう促した。また、発表する際は、人任せにならないように、必ず全員が声を出して生徒役に指導するよう伝えた。その後、各グループで、班長（進行係）、書記（意見等を纏める係）、発表者（模擬授業を発表する際に中心となって展開する係）を決めた。そして、模擬授業で行うフォークダンスを決定し、指導案作成と練習を行った。なお、フォークダンスの曲目は、各グループが同じにならないように、グループ同士で話し合った。

模擬授業を行なった後には、各グループの感想等を各自のワークシートに記入し、その後、グループごとに感想やアドバイスを話し合い、発表し、クラス全体で共有した。

[グループでウォーミングアップの作成及び模擬授業]

ウォーミングアップの模擬授業グループは、新しいメンバーの組み合わせで 8 グループにした。

学生達がグループ活動を始める前に、フォークダンスの模擬授業と同様な内容を教示した。その後、各グループで 5 分程度の曲を選び、ウォーミングアップの創作活動を行い、発表した。発表後は、フォークダンスの模擬授業と同様に振り返りを行い、クラス全体で共有した。

[クラス全員で創作ダンスの制作及び発表(ダンス合同発表会)]

ダンス合同発表会では、学生達が話し合う前に、「主体的・対話的で深い学び」で行うこと、人任せにせず、みんなで考えるように伝えた。クラスの中から、班長（進行係）、副班長（班長のサポート係）、書記（意見等を纏める係）を決定した後、学生主体で、テーマ等を決めた。話が止まったり、助言を求められた時には、出来る限り学生達自身で課題を解決し決定できるように、例えを挙げたり、選択肢を増やしたアドバイスをを行うように心掛けた。

また、学生達が創作等を行う際にも基本的には待つ姿勢で授業を行い、学生から質問等を受けたときには先述したようなアドバイスを行った。また、学生達の創作活動の妨げにならない程度に、励ましのかけ声を

掛けたり、進行するように問いかけたりした。

発表後は、感想文を課題とした。翌週は、ダンス合同発表会のビデオを鑑賞し、グループに分かれて振り返りを行い、クラス全体で感想を共有した。

2-4. 分析

KiSS-18 と自己評価のデータについては、A クラスと B クラスで変化を比較した。自己評価は、設問ごとに得点の平均を算出した。調査対象は、A クラス 48 名、B クラス 47 名であったが、有効回答は、欠損値が無い A クラス男子 36 名・女子 9 名の計 45 名 (95.7%)、B クラス男子 26 名・女子 17 名の計 43 名 (89.6%) の合計 88 名であった。

2-5. 統計処理

KiSS-18 は、クラス間の比較と時系列の変化を検討するために、総得点と 6 つの下位尺度を従属変数としたクラス (A クラス、B クラス) × 時期 (前期初め、前期終わり、後期初め、後期終わり) の 2 要因分散分析を行った。

自己評価は、A クラス及び B クラスに分けて、前期及び後期の項目ごとに対応のない t 検定を行った。前期自己評価と後期自己評価の関係については、ピアソンの相関係数を算出した。前期自己評価と前期終わり社会的スキルの関係、後期自己評価と後期終わり社会的スキルの関係、年間自己評価と社会的スキル年間得点差の関係については、回帰分析を行い、相関係数を算出した。統計処理には SPSSver.26 を用い、いずれの検定においても有意水準は 5% とした。

3. 結果

欠損値が無いデータを有効回答とし、得られたデータは 88 名であった。男子と女子を比較すると、前期初めの社会的スキルには差が認められなかった。

3-1. KiSS-18 による社会的スキルの得点の 2 要因分散分析結果 (クラス×時期)

表 1 は KiSS-18 による社会的スキルの得点の 2 要因分散分析結果 (クラス×時期) を示したものである。いずれの項目においてもクラスと測定時期の交互作用は、認められなかった。初歩的スキルではクラス別には有意な主効果は認められなかったが、測定時期に有意な主効果が認められ、多重比較検定の結果、前期初めと後期終わり ($p < 0.01$)、前期終わりと後期終わり ($p < 0.05$)、後期初めと後期終わり ($p < 0.01$) で有意な差が認められ、いずれも測定時期が遅いほど得点が高くなっていた。高度なスキルでは、クラス別に有意な主効果 (A クラス < B クラス, $p < 0.05$) が認められた。測定時期についても有意な主効果が認められ、多重比較検定の結果、前期初めより後期終わり ($p < 0.05$) で有意な差が認められた。感情処理のスキルでは、クラス別に有意な主効果 (A クラス < B クラス, $p < 0.05$) が認められた。測定時期についても有意な主効果が認められ、前期初めと後期終わり ($p < 0.01$)、前期終わりと後期終わり ($p < 0.05$)、後期初めと後期終わり ($p < 0.01$) で有意な差が認められ、いずれも測定時期が遅いほど得点が高くなっていた。攻撃性に代わるスキルでは、クラス別に有意な主効果 (A クラス < B クラス, $p < 0.05$) が認められた。測定時期についても有意な主効果が認められ、多重比較検定の結果、前期初めと後期終わり ($p < 0.01$)、前期終わり

と後期終わり ($p<0.05$), 後期初めと後期終わり ($p<0.01$) で有意な差が認められ, いずれも測定時期が遅いほど得点が高くなっていた。ストレス処理のスキルでは, クラス別には有意な主効果は認められなかったが, 測定時期については有意な主効果が認められ, 多重比較検定の結果, 前期初めと後期終わり ($p<0.01$) で有意な差が認められた。計画性のスキルでは, クラス別には有意な主効果は認められなかったが, 測定時期については有意な主効果が認められ, 多重比較検定の結果, 前期初めと前期終わり ($p<0.01$), 前期初めと後期終わり ($p<0.01$), 後期初めと後期終わり ($p<0.05$) で有意な差が認められ, いずれも測定時期が遅いほど得点が高くなっていた。総合得点では, クラス別に有意な主効果 (A クラス<B クラス, $p<0.05$) が認められた。測定時期については有意な主効果が認められ, 多重比較検定の結果, 前期初めと前期終わり ($p<0.01$), 前期初めと後期終わり ($p<0.01$), 後期初めと後期終わり ($p<0.01$) で有意な差が認められ, いずれも測定時期が遅いほど得点が高くなっていた。

表1 KiSS-18による社会的スキルの得点の2要因分散分析結果(クラス×時期)

項目	クラス	時期				主効果		多重比較
		前期初め	前期終わり	後期初め	後期終わり	クラス	時期	
初歩的スキル	Aクラス	10.1 (2.3)	10.3 (2.7)	10.3 (2.6)	10.9 (2.1)	2.631	9.125**	前期初め<後期終わり**, 前期終わり<後期終わり*, 後期初め<後期終わり**
	Bクラス	10.6 (2.7)	11.2 (2.5)	10.9 (2.5)	11.9 (2.4)			
高度なスキル	Aクラス	10.8 (1.5)	10.9 (1.6)	10.7 (1.3)	11.1 (1.7)	6.739*	2.694*	Aクラス<Bクラス*, 前期初め<後期終わり*
	Bクラス	11.1 (1.7)	11.8 (2.0)	11.6 (1.8)	11.8 (1.8)			
感情処理のスキル	Aクラス	10.1 (1.5)	10.7 (2.1)	10.2 (1.6)	11.0 (1.8)	4.868*	10.712**	Aクラス<Bクラス*, 前期初め<後期終わり**, 前期終わり<後期終わり*, 後期初め<後期終わり**
	Bクラス	10.8 (1.8)	11.0 (1.7)	10.9 (1.4)	11.8 (1.7)			
攻撃性に代わるスキル	Aクラス	9.9 (1.9)	10.4 (2.0)	10.3 (1.6)	10.9 (2.1)	5.266*	10.666**	Aクラス<Bクラス*, 前期初め<後期終わり**, 前期終わり<後期終わり*, 後期初め<後期終わり**
	Bクラス	10.6 (2.0)	11.1 (1.8)	10.8 (1.7)	11.8 (2.0)			
ストレス処理のスキル	Aクラス	10.4 (1.5)	10.8 (1.6)	10.8 (1.7)	11.3 (2.3)	0.108	6.564**	前期初め<後期終わり**
	Bクラス	10.5 (1.8)	10.7 (2.0)	10.9 (1.8)	11.6 (2.2)			
計画性のスキル	Aクラス	10.5 (1.8)	11.4 (2.0)	11.1 (1.8)	11.6 (2.0)	1.243	10.220**	前期初め<前期終わり**, 前期初め<後期終わり**, 後期初め<後期終わり*
	Bクラス	11.1 (1.8)	11.4 (2.1)	11.4 (2.0)	12.2 (2.0)			
総合得点	Aクラス	61.8 (7.1)	64.5 (9.3)	63.4 (7.3)	66.8 (9.1)	4.130*	17.006**	Aクラス<Bクラス*, 前期初め<前期終わり**, 前期初め<後期終わり**, 後期初め<後期終わり**
	Bクラス	64.7 (9.1)	67.3 (10.1)	66.5 (8.8)	71.1 (10.0)			

上段: 平均値, 下段: (標準偏差)

** : $p<0.01$, * : $p<0.05$, いずれの項目も交互作用なし

3-2. 自己評価

表2の自己評価は, AクラスとBクラスの前期得点, 後期得点, 通年平均得点の平均値と標準偏差及びAクラスとBクラス間の比較について示したものである。

Aクラスは, 前期総合得点 41.3 ± 4.7 , 後期総合得点 40.4 ± 5.2 , 通年平均総合得点 40.9 ± 4.6 であった。Bクラスは, 前期総合得点 44.4 ± 5.4 , 後期総合得点 45.2 ± 5.2 , 通年平均総合得点 44.7 ± 5.0 であった。AクラスとBクラスの前期得点と後期得点を比較すると, Aクラスは全ての項目で0~0.2点低下を認め, Bクラスは全ての項目で0~0.2点の向上を認めた。次に, 前期得点及び後期得点についてAクラスとBクラスの得点差を比較する。前期では, 0.1~0.4点の差を認め, 全ての項目でAクラスよりBクラスの方が高かった。後期では, 0.3~0.6点の差を認め, 全ての項目でAクラスよりBクラスの方が高かった。AクラスとB

クラスの前期得点、後期得点、通年平均得点の比較、「1. みんなで踊る楽しさや喜びを味わえた」、「2. 踊りの特徴と表現の仕方を理解できた」、「3. イメージを深めた踊りを通じた交流や発表ができた」、「4. 表現などの自己や仲間の課題を発見できた」、「8. 互いに協力しながら一人一人の違いに応じた表現や役割を大切にできた」の項目には、($p<0.01$, $p<0.01$, $p<0.01$)の有差を認めた。「5. 合理的な解決に向けて取り組み方を工夫できた」、「6. 自己や仲間が考えたことを他者に伝えることができた」、「7. ダンスの学習に自主的に取り組めた」、「10. 積極的に取り組めた」の項目には、($p<0.05$, $p<0.01$, $p<0.01$)の有差を認めた。「9. 安全を確保しながらできた」の項目では、(n.s., $p<0.01$, $p<0.05$)と前期のみ差を認めなかった(表2)。

表2 AクラスとBクラスのダンス授業前期及び後期の自己評価の変化

自己評価	前期			後期			通年平均		
	A (n=45)	B (n=43)	比較	A (n=45)	B (n=43)	比較	A (n=45)	B (n=43)	比較
1	4.2 (0.5)	4.6 (0.5)	$p<0.01$	4.0 (0.6)	4.6 (0.5)	$p<0.01$	4.1 (0.5)	4.6 (0.5)	$p<0.01$
2	4.0 (0.5)	4.4 (0.5)	$p<0.01$	3.9 (0.6)	4.5 (0.5)	$p<0.01$	4.0 (0.5)	4.4 (0.5)	$p<0.01$
3	4.0 (0.5)	4.4 (0.5)	$p<0.01$	3.9 (0.6)	4.5 (0.6)	$p<0.01$	4.0 (0.5)	4.4 (0.5)	$p<0.01$
4	3.9 (0.6)	4.3 (0.6)	$p<0.01$	3.9 (0.6)	4.5 (0.6)	$p<0.01$	3.9 (0.6)	4.4 (0.6)	$p<0.01$
5	4.0 (0.6)	4.3 (0.7)	$p<0.05$	4.0 (0.6)	4.4 (0.6)	$p<0.01$	4.0 (0.5)	4.3 (0.6)	$p<0.01$
6	4.0 (0.6)	4.3 (0.6)	$p<0.05$	4.0 (0.6)	4.5 (0.6)	$p<0.01$	4.0 (0.5)	4.4 (0.6)	$p<0.01$
7	4.2 (0.6)	4.5 (0.6)	$p<0.05$	4.1 (0.6)	4.6 (0.5)	$p<0.01$	4.2 (0.5)	4.5 (0.5)	$p<0.01$
8	4.1 (0.5)	4.4 (0.6)	$p<0.01$	4.0 (0.6)	4.5 (0.5)	$p<0.01$	4.1 (0.5)	4.5 (0.5)	$p<0.01$
9	4.4 (0.5)	4.5 (0.6)	n.s.	4.3 (0.5)	4.6 (0.5)	$p<0.01$	4.3 (0.4)	4.5 (0.5)	$p<0.05$
10	4.4 (0.4)	4.6 (0.5)	$p<0.05$	4.2 (0.6)	4.6 (0.5)	$p<0.01$	4.3 (0.5)	4.6 (0.5)	$p<0.01$
総合得点	41.3 (4.7)	44.4 (5.4)	$p<0.01$	40.4 (5.2)	45.2 (5.2)	$p<0.01$	40.9 (4.6)	44.7 (5.0)	$p<0.01$

上段：平均値，下段：(標準偏差)

3-3. 社会的スキルと自己評価

図1-1~2は、横軸に前期自己評価得点と縦軸に後期自己評価得点の関係を示したものである。図1-1 Aクラスの結果は、前期自己評価と後期自己評価の間には正の相関関係が認められた($r=0.700$, $p<0.001$)。図1-2 Bクラスの結果は、前期自己評価と後期自己評価の間には強い正の相関関係が認められた($r=0.862$, $p<0.001$)。

図2-1~2は、前期自己評価得点を独立変数、前期終わり社会的スキル得点を従属変数とする相関関係を示したものである。Aクラス： $r=0.329$ ($p<0.05$)、Bクラス： $r=0.502$ ($p<0.001$)であり、AクラスとBクラスともに、前期自己評価と前期終わりの社会的スキルの間には、Aクラスは5%水準のやや弱い正の相関関係、Bクラスは1%水準のやや強い正の相関関係が認められた。

図3-1~2は、後期自己評価得点を独立変数、後期終わりの社会的スキル得点を従属変数とする相関関係を示したものである。Aクラス： $r=0.280$ (n.s.)、Bクラス： $r=0.322$ ($p<0.05$)であり、後期自己評価平均の合計と後期社会的スキルに、Aクラスには弱い正の相関関係を認められた。Bクラスは5%有意水準のやや弱い正の相関関係が認められた。

図 4-1～2 は、通年自己評価を独立変数、社会的スキルの年間得点差（後期終わり－前期初め）を従属変数とし、相関関係を示したものである。A クラス： $r=0.179$ (n.s.)，B クラス： $r=0.056$ (n.s.)，A クラスと B クラスともに自己評価と社会的スキル年間得点差には相関関係は認められなかった。

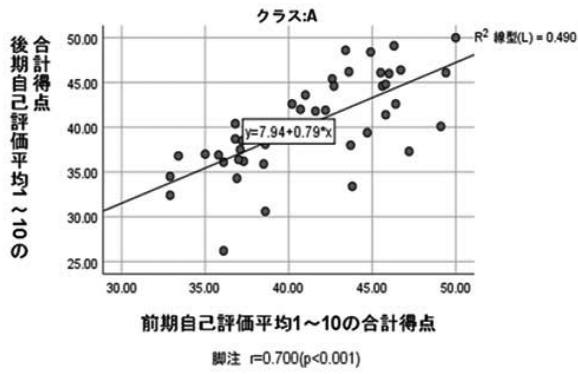


図 1-1 自己評価の前期後期の関係 (A クラス)

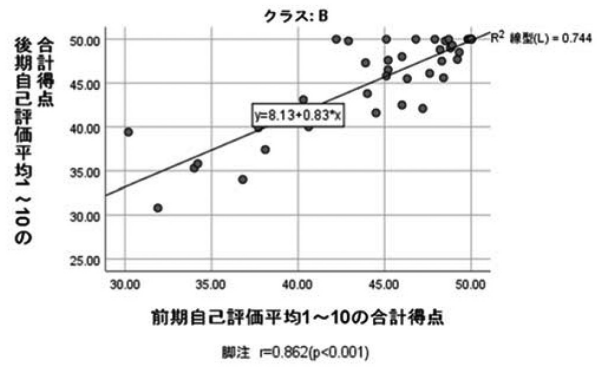


図 1-2 自己評価の前期後期の関係 (B クラス)

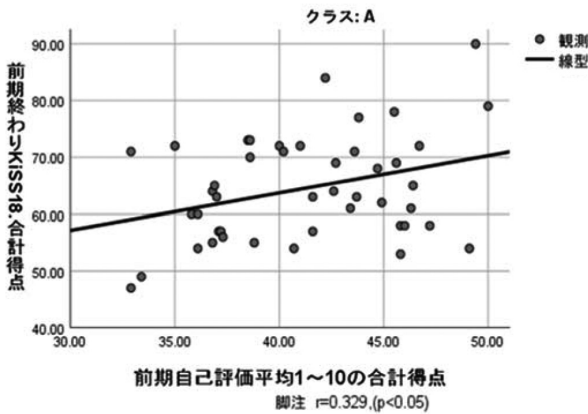


図 2-1 前期自己評価と前期終わり社会的スキルの関係 (A クラス)

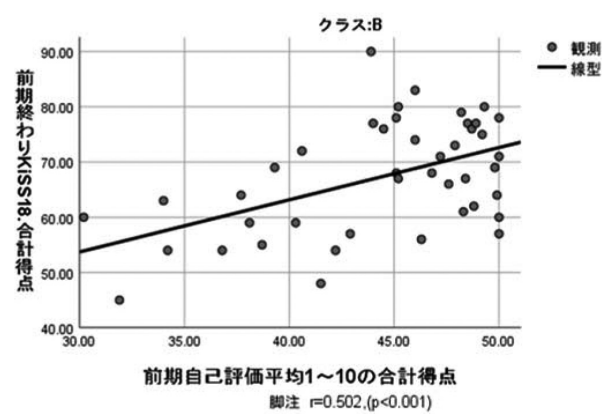


図 2-2 前期自己評価と前期終わり社会的スキルの関係 (B クラス)

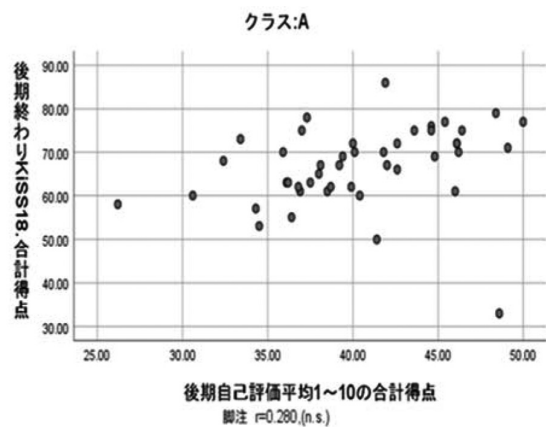


図 3-1 後期自己評価と後期終わり社会的スキルの関係 (A クラス)

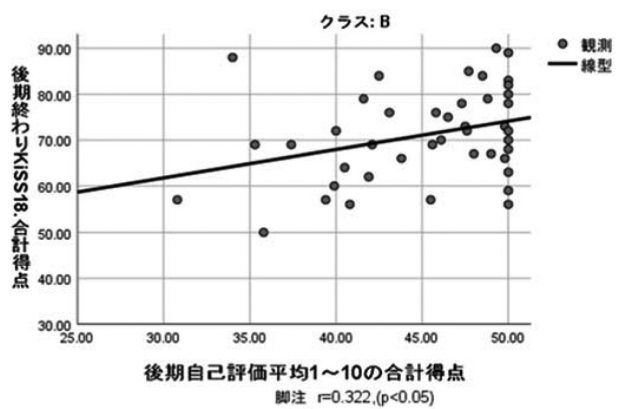


図 3-2 後期自己評価と後期終わり社会的スキルの関係 (B クラス)

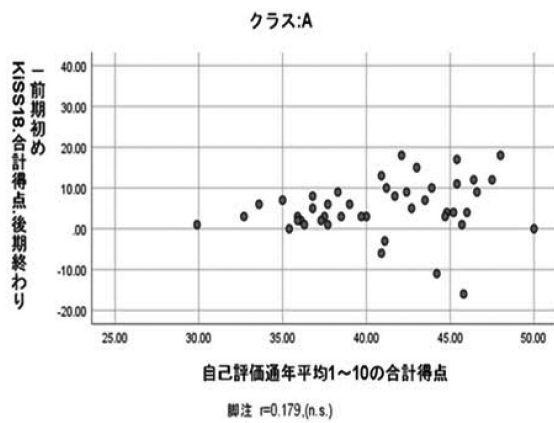


図 4-1 年間自己評価と社会的スキル年間得点差の関係 (A クラス)

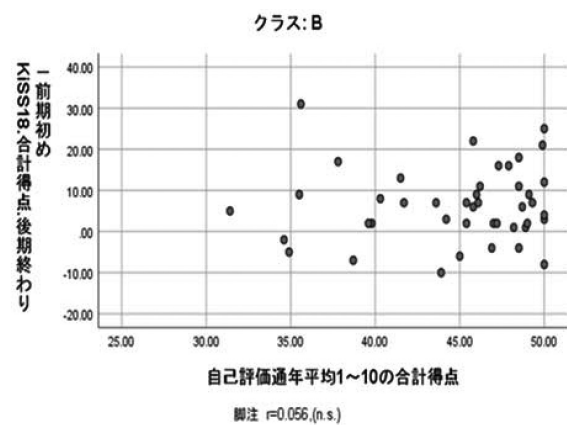


図 4-2 年間自己評価と社会的スキル年間得点差の関係 (B クラス)

4. 考察

4-1. 社会的スキル

ダンスⅡ受講者の前期初めの社会的スキル得点は、A クラス 61.8 ± 7.1 、B クラス 64.7 ± 9.1 で、菊池の大学生の平均得点 56.40 ± 9.64 と比較すると高い。O 大学の学生は、小学生や中学生からスポーツを始めて、スポーツを通してコミュニケーションスキルや社会のルールを体得し、学生の体育系クラブやサークルへの加入率も高い。また、大学の方針として、地域社会に貢献する様々な活動が積極的に行われ、子どもから高齢者まで色んな年代の人々と関わり、実践的な指導の経験を積んでいる学生も多い。

測定時期の多重比較の結果は、前期初めと前期終わり、後期初めと後期終わり、前期初めと後期終わりに向上が認められた。前期初めと前期終わりを比較すると、総合得点、計画性のスキルで前期初めより前期終わりの方が有意に高い値を示した。前期終わりとは後期終わりでは、初歩的スキル、感情処理のスキル、攻撃性に代わるスキルにおいて、前期終わりより後期終わりの方が高い値を示した。後期初めと後期終わりを比較すると、総合得点、初歩的スキル、感情処理のスキル、攻撃性に代わるスキル、ストレス処理のスキル、計画性のスキルにおいて後期初めより後期終わりの方が高い値を示した。前期初めと後期終わりを比較すると、総合得点、初歩的スキル、高度なスキル、感情処理のスキル、攻撃性に代わるスキル、ストレス処理のスキル、計画性のスキルの全てが前期初めより後期終わりの方が高い値を示した。

前期授業では、少人数グループで、現代的なリズムのダンスの創作及び発表と、グループメンバーをチェンジしてフォークダンスの模擬授業案を作成し、役割を分担して発表を行った。模擬授業終了後は、各人が感想を記入、グループで話し合い、発表したグループには、生徒役のグループの感想を印刷して渡した。また、毎回の授業終了時、ダンス記録用紙(資料2)には、授業内容、気付き、自己評価を記録し、思考を促した。グループでのダンス創作やフォークダンスの指導案作成を行う中で、計画性のスキルを向上させたと考えられる。模擬授業やダンス発表では、仲間と密に関わり試行錯誤を重ねるため、ラポールが形成されやすく信頼関係を構築し親交が深まったのだろう。

前期終わりとは後期初めの社会的スキルを比較すると、有意差は認めなかったが社会的スキルの得点は低下していた。これは、夏休み期間に入り、学生を取り巻く環境の変化による他者との関わり方が影響を与えたのではないだろうかと考えられる。

前期終わりと後期終わりでは、初歩的スキル、感情処理のスキル、攻撃性に代わるスキルに有意差を認めた。これは、前期と後期の授業内容の違いが影響を与えているのではないかと考える。前期授業では、教員が授業を進行したのに対し、後期授業では、学生が主体となり仲間と協力しながらダンス作品を創作した。そのため、仲間同士で質問したり、助け合ったり、感情を表現したりする場面が増えたのだと考えられる。社会的スキルは、前期初めより前期終わり、後期初めより後期終わりの方が高く、前期と後期に有意差を認めた。後期授業に行われたダンス合同発表会では、前期授業のクラス内ダンス発表とは異なり、後期授業の大半の時間を費やしクラス全員で1つのダンス作品を創り発表した。ダンスの創作過程は、テーマを決定し、それに沿った振り付けとともに、音楽や衣装を決めるなど、多くのことについて対話し、協力し合い、練習を重ねた。これは、ダンス授業回数を重ねるごとに様々な仲間との会話や関わりなどが増えたこと、特に10クラス約300名が交代で発表するダンス合同発表会への参加は、クラス全員で協力して創作ダンス作品を制作することにより、仲間同士が一致団結し、完成度を上げるように工夫していた。発表後の達成感は、クラス内での発表よりも非常に大きく自己肯定感を高め、その経験が、前期授業よりも後期授業の社会的スキルを向上させた一要因だろうと考えられる。それに加え、模擬授業の「計画」「実施」「評価」を繰り返したことも、社会的スキルを向上させたのだと考えられる。

高度なスキルとストレス処理のスキルは、前期初めと後期終わりにのみ有意差が認められた。これは、人に助けを求めたり、支持を与えたり、謝ったりする高度なスキルと、難しい会話に応じたり、失敗を処理したり、避難を処理したりするストレス処理のスキルの獲得には時間を要したのだろう。

クラスでの比較では、総合得点、高度なスキル、感情処理のスキル、攻撃に代わるスキルの4項目で主効果が認められ、いずれもAクラスよりBクラスの方が有意に高い得点であった。ダンス創作活動では、Aクラスは、ダンスを専門としている学生はおらず、各人が戸惑いながらも仲間と一緒に波長を合わせながら試行錯誤を重ね協力し、懸命に取り組んでいた。一方、Bクラスは、ダンスを専門としている学生やダンスが好きな学生が数名おり、特にその学生達が、自分達が行いたいことを伝えたり、ダンスの動きや表現方法がわからない学生に教えたりしていた。つまり、AクラスはBクラスよりも、人に助けを求める、指示を与える、自分達が行いたい感情を表現する、他人を助けたりする学生が少なかったのではないかと考えられる。また、Bクラスは、完成度の高いダンス作品を創作すると目標を掲げ、時に場の空気が重く感じることもあったが、各人で気持ちを切り替えてダンス活動を行っていた。これは、お互いに謝ったり、和解したり、自分をコントロールしていたのではないかと考えられる。このことから、クラスの状況によって授業内容を変更するなどの工夫も必要となると考えられる。

4-2. 自己評価

自己評価は、AクラスとBクラスを比較すると、前期では、前期得点及び後期得点ともにAクラスよりBクラスが高く、前期の「9. 安全を確保しながらできた」の一項目のみ差を認めなかったが、他項目の自己評価は、AクラスよりBクラスが高かった。前期初めの社会的スキルには男女差を認めなかったが、AクラスとBクラスの男女比率が関係しているのではないかと考えた。Laurent と Hodges¹⁶⁾ は、女性は共感能力が高いために、他者の気持ちを読み取る能力も高いという研究結果を報告している。Bクラスに、このような学生が多い場合は、自己評価が高くなる可能性もあると考えられる。他には、クラス内での相乗効果が考えられる。Aクラスにはダンスを専門としている学生がいないのに対し、Bクラスにはダンスを専門としている学生やダンスが好きな学生が数名含まれていた。また、その学生達は、クラス内ダンス発表や模擬授業、ダンス合同発表会の創作過程の際にもリーダーシップを発揮していた。他の学生は追従する傾向が

みられ、AクラスよりBクラスの自己評価が高くなったのではないかと推測される。また、その相互作用に加え、ダニング=クルーガー効果も生まれた可能性も考えられる。ダニング=クルーガー効果とは、能力の低い人ほど自らを過大評価してしまう傾向のことをいう。ダンスの苦手な学生達が、ダンスを専門としている学生や得意としている学生に追従し、達成感を味わい高い評価をつけたと考えられる。また、授業終了時に毎回、自己評価や気づきを含むダンスⅡ学習ノートを記入することにより、自分の行動を振り返り、より深い学びや気づきに繋がったのだと考えられる。

4-3. 社会的スキルと自己評価の関係

前期自己評価得点と後期自己評価得点の関係は、Aクラスは正の相関関係が認められ、Bクラスは強い正の相関関係が認められた。両クラスとも、前期自己評価の高い学生は、後期自己評価も高く、AクラスよりBクラスの得点が高かった。前期自己評価得点と前期終わり社会的スキル得点の相関関係は、Aクラスは5%水準のやや弱い正の相関関係、Bクラスは1%水準のやや強い正の相関関係が認められ、前期初めと前期終わりの関係は、自己評価の高いBクラスの方が、有意に社会的スキルは向上していた。後期自己評価得点と後期終わり社会的スキル得点の関係は、Aクラスは弱い正の相関関係を認め、Bクラスは5%有意水準のやや弱い正の相関関係が認められた。

クラスについて有意差が認められたのは、総合得点、高度なスキル、感情処理のスキル、攻撃性に代わるスキルでAクラスより自己評価の高いBクラスの方が向上していた。Aクラスより自己評価の高いBクラスの方が、メンバーと協力し積極的にに関わり合い、課題を繰り返すうちに、その成功が自信に繋がり、積極的に行動したことが自己肯定感を高め、相互関係の中で社会的スキルの向上に繋がったのだろう。

5. まとめ

本研究は、O大学におけるダンス授業実施の効果に関して対人関係能力の向上に焦点を当て、授業の中に社会的スキルの向上を意図して、模擬授業やダンス創作をグループやクラス(Aクラス、Bクラス)単位で実施し、社会的スキルと自己評価の関係をクラスごとに比較検討することを目的とした。その結果、以下のことが明らかになった。

社会的スキルは、前期初め、前期終わり、後期初め、後期終わりの通年授業における測定時期とクラスにおいて主効果が確認された。測定時期では、総合得点及び6つの下位尺度で有意な主効果が確認され、測定時期と得点の関係は授業の回数を経過した方が有意に高い値を示した。測定時期の多重比較では、前期初めと前期終わりの間には総合得点及び1つの下位尺度、前期終わりと後期終わりの間には3つの下位尺度、後期初めと後期終わりの間には総合得点及び5つの下位尺度、前期初めと後期終わりの間には総合得点及び6つ全ての下位尺度で認められた。クラスにおける主効果は、総合得点及び3つの下位尺度で認められ、自己評価が高いクラスが低いクラスより有意に高い値を示した。

相関関係では、前期自己評価得点と後期自己評価得点の間には、両クラスとも正の相関関係が認められ、前期自己評価が高いクラスの方が低いクラスよりも強い相関関係が認められた。前期自己評価得点と前期社会的スキルの間には、両クラスとも正の相関関係が認められ、自己評価が高いクラスの方が低いクラスよりも強い相関関係を認められた。後期自己評価得点と社会的スキルの間には、両クラスとも弱い相関関係が認められた。通年自己評価得点と社会的スキル年間得点差には相関関係は認められなかった。

社会的スキル得点は、両クラスとも大学生の平均得点よりも高く、両クラスとも前期初めと後期終わりを比較すると得点は有意に向上していた。両クラスとも、通年平均自己評価と社会的スキル得点差には有意差を認めなかったが、自己評価の高いクラスの方が、社会的スキル得点が向上していた。前期終わりと夏休みを挟んだ後期初めの社会的スキルを比較すると、有意差は認めなかったが前期終わりより後期初めの社会的スキル得点は低下していた。このことから、ダンスの持つ特性を生かした授業を、自己評価を高めながら展開することが、社会的スキルの向上に寄与できることが示唆された。

今回は、クラス間の比較をしたが、クラス内の低得点者と高得点者の変化を明らかにし、社会的スキル低得点者が社会的スキルを獲得できるよう授業を工夫することも必要であると考えた。

参考・引用文献

- 1) 大坊 郁夫：社会的スキル・トレーニングに生かされる言語・非言語コミュニケーションの働き，電子情報通信学会技術研究報告，HCS，ヒューマンコミュニケーション基礎，第106巻，第219号，pp.31-36，2006.
- 2) 相川 充：人づきあいの技術 —社会的スキルの心理学—，サイエンス社，2000.
- 3) 五十嵐 祐：CMCの社会的ネットワークを介した社会的スキルと孤独感との関連性，社会心理学研究，編17，pp.97-108，2002.
- 4) Hall, W.E., & Gaeddert, W.: Social skills and their relationship to scholastic achievement. *Journal of Genetic Psychology*, 96, 269-273, 1960.
- 5) 相川 充・佐藤 正二・佐藤 容子・高山 巖：孤独感の高い大学生の対人行動に関する研究 —孤独感と社会的スキルとの関係—，社会心理学研究 第8巻，第1号，pp.44-55，1993.
- 6) マイケル・アーヅル(著)・辻 正三・中村 陽吉(訳)：対人行動の心理，誠信書房，1972.
- 7) 和田 実：対人有能性に関する研究 —ノンバーバルスキル尺度およびソーシャルスキル尺度の作成—，実験社会心理学研究，第31巻，pp.49-59，1991.
- 8) 前田 健一・片岡 美菜：幼児の社会的地位と社会的行動特徴に関する仲間・実習生・教師セグメント，教育心理学研究，第41巻，pp.152-160，1993.
- 9) 西田 順一・橋本 公雄・徳永 幹雄・柳 敏晴：組織キャンプ体験による児童の社会的スキル向上効果，野外教育研究 5-2，pp.45-54，2002.
- 10) 中澤 史・麓 正樹・谷木 龍男・山崎 将幸：スキー実習による受講生の社会的スキル向上効果，法政大学スポーツ研究センター紀要，第32巻，pp.9-13，2014.
- 11) 中澤 史・上野 雄己：スポーツ演習による受講生の社会的スキル向上効果に関する検討，法政大学スポーツ研究センター紀要，第34巻，pp.1-4，2016.
- 12) 文部科学省：保健体育編 体育編，高等学校学習指導要領（平成30年告示）解説，2018。／文部科学省：保健体育編 中学校学習指導要領（平成29年告示）解説，2017.
- 13) 山本 浩二・中井 聖：高等学校におけるダンス授業の効果の検討，近畿医療福祉大学紀要，Vol.13(2) pp.49-56，2012.
- 14) 高山 昌子：ライフスキル獲得を目指した授業実践：創作レクリエーションダンスを通しての学生の変化，太成学院大学紀要，第16巻，pp.73-77，2014.
- 15) 菊池 章夫編(著)：社会的スキルを測る：KiSS-18ハンドブック，川島書店，2007.
- 16) Laurent, S.M., & Hodges, S.D. : Gender roles and empathic accuracy : The role of communion in reading minds. *Sex Roles*, 60, 387-398, 2009.

資料1 ダンスⅡ 授業内容

学期	回	授業内容
前期 授業	第1回	オリエンテーション
	第2回	現代的なリズムのダンスの指導法①:リズムに乗る(8844221111)
	第3回	現代的なリズムのダンスの指導法②:友達と関わって動く, 空間の工夫
	第4回	現代的なリズムのダンス, リズムのダンスをグループで創作(リズムのダンス創作①)
	第5回	現代的なリズムのダンス, リズムのダンスをグループで創作(リズムのダンス創作②)・ミニ発表①
	第6回	現代的なリズムのダンス, リズムのダンスをグループで創作(リズムのダンス創作③)・ミニ発表②
	第7回	現代的なリズムのダンス, リズムのダンスをグループで創作(リズムのダンス創作④)・全体発表
	第8回	創作ダンス:デフォルメ
	第9回	創作ダンス:ものを使つての表現 一ひと流れの動きー
	第10回	創作ダンス:日常の動きからダンスへ
	第11回	模擬授業:フォークダンスの指導案作成
	第12回	模擬授業:フォークダンスの指導案作成と発表練習
	第13回	模擬授業:フォークダンスの指導案発表(グループ発表①)
	第14回	模擬授業:フォークダンスの指導案発表(グループ発表②)
	第15回	模擬授業:フォークダンスの指導案発表(グループ発表③), まとめ
後期 授業	第16回	オリエンテーション, 昨年度のダンス合同発表会のビデオ鑑賞, ダンス合同発表会のテーマなどについて話し合う
	第17回	模擬授業:ウォーミングアップの創作, ダンス合同発表会に向けてグループで作品創作(創作活動①)
	第18回	模擬授業:ウォーミングアップの創作と発表練習, ダンス合同発表会に向けてグループで作品創作(創作活動②)
	第19回	模擬授業:ウォーミングアップ(グループ発表①), ダンス合同発表会に向けてグループで作品創作(創作活動③)
	第20回	模擬授業:ウォーミングアップ(グループ発表②), ダンス合同発表会に向けてグループで作品創作(創作活動④)
	第21回	模擬授業:ウォーミングアップ(グループ発表③), ダンス合同発表会に向けてグループで作品創作(創作活動⑤)
	第22回	模擬授業:ウォーミングアップ(グループ発表④), ダンス合同発表会に向けてグループで作品創作(創作活動⑥)
	第23回	模擬授業:ウォーミングアップ(グループ発表⑤), ダンス合同発表会に向けてグループで作品創作(創作活動⑦)
	第24回	模擬授業:ウォーミングアップ(グループ発表⑥), ダンス合同発表会に向けてグループで作品創作(創作活動⑧)
	第25回	グループで創作した作品を一つの作品に統合, ダンス合同発表会に向けて踊り込み
	第26回	ダンス合同発表会の創作作品の踊り込み, 最終確認
	補講	ダンス合同発表会
	第27回	模擬授業:ウォーミングアップ(グループ発表⑦), ダンス合同発表会の振り返り
	第28回	模擬授業:ウォーミングアップ(グループ発表⑧), 現代的なリズムのダンス
	第29回	模擬授業:ウォーミングアップ(グループ発表⑨), 現代的なリズムのダンス
第30回	補講(ダンス合同発表会の振り替え)	

資料2 ダンスII 学習ノート 記録用紙

実践記録

ダンスII クラス 学籍番号 _____ 氏名 _____
 第 回 月 日 ()

今日の課題 _____

授業内容 (詳しく記入)

気づき

--

自己評価 該当する番号に○をつけてください

(1できなかった 2ややできなかった 3どちらともいえない 4やできた 5できた)

みんなで踊る楽しさや喜びを味わえた	1	2	3	4	5	合計 点
踊りの特徴と表現の仕方を理解できた	1	2	3	4	5	
イメージを深めた踊りを通した交流や発表ができた	1	2	3	4	5	
表現などの自己や仲間の課題を発見できた	1	2	3	4	5	
合理的な解決に向けて取り組み方を工夫できた	1	2	3	4	5	
自己や仲間が考えたことを他者に伝えることができた	1	2	3	4	5	
ダンスの学習に自主的に取り組めた	1	2	3	4	5	
互いに協力しながら一人一人の違いに応じた表現や役割を大切にできた	1	2	3	4	5	
安全を確保しながらできた	1	2	3	4	5	
積極的に取り組めた	1	2	3	4	5	